

聖淨分別論序説

藤原了然

一八

(一)

所説の形式よりするならば、教相判釋なるものゝすべては、一代佛敎の組織化であると稱してよい。そして、この一代佛敎の組織化に當つて、教相判釋の創唱者の主觀の相違が今日に到るまで、さまざまなる敎判の種類を樹立し來つたのである。

もちろん、こゝでいふ主觀とは、普遍性を缺く獨斷や、妄執に依據する獨善の如きものでないことはいふまでもない。それは個性に立脚した正しき認識、いひかへれば、各個人の識見の謂でなければならぬ。

同一個人の識見といへども、その表相が、時處位の變遷するにつれて必ずしも同一相状をとるものでないことは論を要しないところであるが、他面、その原理的なる部分に關する限り、變化や撞着のあらう筈はない。こゝでいふ表相の種類々相として祖師一代の論著や言行が考へらるべきであるし、原理的な骨格として教相判釋の要針が解さるべきである。しかし、如何なる教相判釋にしても、それが教相判釋として具体化される場合には、必ずそこに一の意圖が含まれてゐる筈である。その意圖とは、いふまでもなく、自説の法門が一代佛敎の究極位に立つものであるといふ確信とこれが論證に外ならない。この究極位といふ意味について、理論的深遠を誇るもの、實踐的優位を揚言するもの、或は所被の機根の長短多少を論明するもの等の種々あることは、周知のことに屬するが、要するところ、敎判なるものゝこれら

の性格は、聖淨分別の論考に當つても是非とも考究さるべきことと考へられる。

(11)

聖淨分別の史的考察はこゝでの主題とさるべきではないが、いはゆる聖道門淨土門の對比論考に先だつて、この兩者が、釋尊の直説に向つて如何なる立場をとるかといふことが考究さるべきである。

聖淨二門の夫々が、何れも揆を一にして、自説が、佛説の正系であり、釋尊自内證の嫡流なることを力説してゐるところとは言を待たないところである。従つて、この兩者は、各の所論を是認するならば、結局するところ、同じ高嶺の月を眺める二つの道と評するの外はないであらう。

しかし、こゝで留意さるべきことは、この聖淨分別の論は、淨土門側の提唱にかゝるものであつて、聖道門側よりのそれではないといふことである。即ち、聖道家によるならば、聖道諸門が佛敎の全部であり、聖道の敎によつて得脱の途は昭々たるものがあるわけである。かゝる聖道門の外に淨土門が唱導されるに到つたことについては、餘程の理由がなければならぬ筈である。聖道の敎に嫌たらざるものが認められるとか、聖道の敎によつては、救済されえない群生の存在が嚴存するとか、或は、淨土門の常套語たる易修而功高とかいふ点が、判然とするのでなければならぬ。

しかし、このやうなことが明確に把握されるためには、聖道一門に對する深き學解と熾烈なる行的體驗が先行するものでなければ、淨土門の主張は獨善の譏を免れないし、幻想の果敢なさを懷くにすぎないこととなる。鎮西上人の名言

沙門某甲、昔聖道門を學せしとき、いさゝか彼の淨佛國土成就衆生の義を習ひ傳へ、今淨土門に入るの後、又この選擇本願念佛往生の義を相承す。二師の相傳をもつて聖敎の諸文を見るに、その謾更に以て敎文に違はず、單聖道門の人、單淨土門の人は之を知るべからず、聖道淨土兼學の人これを知るべし。この意を得てより一切の大乘經を披らき、一切の大乘論を見るに隨喜の涙禁じがたし、これ則ち、聖敎の源底なり、諸門の奧藏なり、佛菩薩の秘術なり」

徹選擇上)

といふ一文は深く味はゝるべきである。

こゝに於てわれわれは、淨土門の高調は、なんらかの意味に於て、聖道門によつては充されざるものを痛感し、体認するところに起因することを學ばしめられるのである。そしてこの聖道門によつて充されざるものゝ存することの論明が、そのまゝ淨土門の存在理由の立證であり、聖淨分別論の眼目でもあるわけである。

(三)

淨土教理史が記録する聖淨分別の端緒的なものは、龍樹所説の怯弱凡夫論である。しかし、龍樹の難易教判は、その所表現に關する限り、法自体としては、淨土門を次善的なものとして扱つてゐるやうである。勿論、その内實を問ふならば、龍樹の如き自他共に駿足を謳はれる人が怯弱の機といふことになれば、恐らく怯弱ならざる人士は考へられないことになるわけではあるが、とまれ、淨土門のかくの如き地位は、久しきに亘つて佛敎界の定説の如く考へられて來た事は事實である。

論註に於ける曇鸞の勞力は、淨土教に理論的根據を與へるといふ意味に於て劃期的なものであることは論を俟たないところである。即ち、學解として淨土教は聖道教に對抗しうる立場にまで高められたといふことが出来る。端的にいふならば、その所論は、淨土の依正二報悉くが、法性の理の必然的展開——大悲躍動——であると説くものである。后世、殆んどすべての淨土諸家が、論註を扱ふこと格外なるものが見受けられるのはこれがために外ならない。

しかし、論註が、いはゆる十四件の獨創をもち、時には、註釋書といふよりは獨自の著作とさへ評される異彩を放つものであるにもせよ、それは、いはゞ學的な面に於けるものであり、行修といふ面と著作の體裁といふ点に於て、道綽の安樂集は更に進取的なものが伺はれる。説くところの聖淨教判は多分に對敎界的な考慮が拂はれてゐることは掩はれ

ないにしても、淨土教なるものゝ存在理由は、具體的、實踐的に明示されているといふことが出來やう。

所説の二種の勝法とは、聖道淨土の二門を教法として同列視するものであるが、「聖道の一種は今時證しがたし」に到つては、論調はなほだ高いものが伺はれる。勿論、當時漸く旺んなる末法思想がこの論歩に向つて大きな影響を與へてゐることはいふまでもない。けれども、末法といふことは、客觀的事實と考へるよりは、主觀的な反省に伴ふ實感と考へらるべきであらう。古聖の吐露する深い罪惡觀がこのことの傍證としてあげらるべきであらう。

かく考へるならば道綽の意、その所表現に於て二門を措くと雖も、得脫の要道としてとらるべきものは、すでに淨土の教の外にはないことが明示されてゐるわけである。

(四)

古今楷定の師善導に到つては、徹底せる本願念佛の提唱者といふ評言にふさはしいものがある。善導に於ては、難易、聖淨の論はすでに過去の問題であり、殆んど論ずるに足りない、參考的な價値に於て考へられてゐる。

従つて善導の著述にとりあげられる主題的なものは、二行分別であり、助正論判である。そして、選ばれるものは、彌陀に親近なるものであり、更に進んでは、佛願に隨順するものである。こゝに到つて、淨土教は、はじめて聖道的なるものを考慮に入れない立場、いひかへれば、聖道門に對立して自己の存在理由を明かにせんとする負け目を豫想される立場を離れて、丁度聖道門が、淨土門を慮外に於て存在した立場と同格の位に立つに到つたものといふことが出來やう。

希有珍唱と尊崇される善導の金言名説は、淨土教をしてかくの如き高場にまで昂揚した善導の心證の片鱗として理解さるべきであらう。

(五)

教學としての宗祖の勞作は、善導の本願念佛に更に選擇の意義を見出したことに存するといはれる。偏依善導とは、偉大なる先達に對する僞らざる所懐であつたに相違ない。しかし、この偏依善導なる謙虚さは、一代佛教學解の結論として披歴されたことはいふまでもない。

そして、この簡單なるが如き事實は、次のことを想はしむるものがある。即ち、宗祖教學に於ける淨土教の地位は、淨土教の教界に於けるかつての地位、聖勝淨劣は勿論、善導に於て確立された聖淨平等を更にすゝめて、聖劣淨勝にまで論究を躍進せしめたものといはるべきであらう。宗祖のあらゆる著作なるものが、その學解的なるものと行修的なるものとのすべてを通じて、この聖劣淨勝の力説にあることは炯眼すべからくこれを察せらるべきであるが、その具体的な論理は他日を期さるべきである。

何れにしても、宗祖の聖劣淨勝の道破こそ、淨土一宗が開創されるに到つた根本理由でなければならぬし、又この識見あるによつてはじめて、淨土立教開宗は具体化したものといへるであらう。